

1. わたしの、おにい様

茹だるように暑い夏も、このカントリーハウスの奥まったところにある薄暗い図書室では比較的涼しい。

読書机の上にあるランプに照らされた古書はわたしを引き込み、世界から音を奪い去る。

それが古い時代に綴られた物語だとしても。こうして一度読んひとたびでみれば、輝きは衰えていないと知り得るのだ。

例えどれほど時を経ても、人の心を動かす傑作は、変わらず傑作なのである。

「ああ、ここにいたのか」

ページを捲る音に、違う音が混じった。
低くしっとりとした、耳心地の良い声。

その声にハツとして振り返れば、遙か後方にある出入口から見知った顔が覗いていた。

「あ……、おにい様」

「うん、邪魔をしてごめんね」

穏やかに笑ってこちらに歩み寄ってくる『おにい様』が、ゆつくりとドアを閉める。

微かに鳴った、パタンという音。

わたしは咄嗟に前を向き、さらりと髪を手櫛で整えた。

そしてそれから椅子の向きを変えて、こちらに向かってくるおにい様を真っ直ぐ見つめる。

座ったまま背筋を伸ばした私を見て、おにい様が緩く微笑んだ。

コツコツと鳴る革靴の音。外出していたのか、彼は外行きの格好をしていた。

「邪魔では、ありません」

「そう？それならよかった」

すぐ傍までやってきたおにい様が、緩く腰を屈める。

にこにこと笑う整った顔^{かんばせ}が、暗い室内でも眩しく見えた。

「お仕事、でしたか？」

現侯爵であられる『おとう様』の後継者として、おにい様はおとう様の手伝いをされている。

おとう様はまだまだお若いので後を継ぐのは当分先のようなだが、そのために今からおにい様は忙しくされているのだ。

その用事で出掛けていたのかと問いかければ、よく分かったねと大きな手で頭を撫でられた。

それが嬉しくも恥ずかしくて、わたしはキュツと下唇を噛む。
するとそれを咎めるように、顎をトントンと指先で叩かれた。

気恥ずかしさに一度目を伏せて。気持ちを切り替えてから、わたしは嚙んでいた下唇を開放する。

「……おにい様、おかえりなさい」

「うん、ただいま」

見つめる先の青が、嬉しそうにとろりと蕩けた。

真っ直ぐこちらを見つめ返してくれるその瞳は、あたたかな熱を湛えている。

「お土産もあるんだよ」

おにい様の手元でカサカサと音がしたかと思えば、包装を剥かれたチョコレートが口許に寄せられる。

わたしは困ってしまって、そっと眉尻を下げた。

「——でも、わたし……」

お仕事もお勉強も頑張っているおにい様とは違い、わたしはお屋

敷でゆったりと過ごしているだけ。

淑女教育は受けているが、特にこの家のためになることは何もしていないのだ。——養い子なのに。

「チョコレート、好きだろう？……ああほら、俺の体温で溶けてしまふよ。口を開けて？」

「あう……」

唇にふにふにと当てられるチョコレートが、触れているところだけじわじわと溶けていく。そしてそれをわたしは、無意識の内にペロリと舐めてしまった。

コク深く、濃厚な味わい。

さすがはおにい様だ。本当に、わたしのことをよく分かっている。チョコレートはチョコレートでも、特にわたしが好きな味だった。

「あむ……っ」

「ん。素直でいいこだ」

観念してパクリと食らいき、もぐもぐと咀嚼すれば。すぐにトロリと蕩けて、広がった甘み。

「……!!」

「ふふ、美味しいね？」

頬を両手で押さえてコクコクと頷くわたしの頭を、またおにい様が撫でてくれる。

可愛いなあと呟かれて耳まで赤くなれば、額にちゅっ、と口付けられた。

カカオの香りに混じって、ふんわりと、甘く爽やかな香りがする。外出するときにおにい様がつける、コロンの香りだ。

「あ、う……おにい、様……」

「あーあー、茹でダコになっちゃって」

縮こまって震えるわたしの体をおにい様が包み込んで、頬に口付けてくる。

わたしはもう、いっぱいいいっぱいで。意識を半ば遠くさせながらされるがままだ。

「よい、しょ」

「ひゃ……!？」

すると突然、抱き上げられて。わたしは横抱きにされてしまった。驚いて目を白黒させていると、軽々と抱きかかえられたまま、スリスリと頬を擦り合わされる。

服越しに彼と触れ合っている左半身が、熱い。

「そっちの長椅子に移動しようか」

「あわ、えっ？ わあ、ええっ？」

わたしが動揺している間に、おにい様がスタスタと歩いていく。

そしてわたしを抱えたまま、彼はストンと長椅子に腰を下ろした。わたしを横向きのまま膝の上に下ろして——いつの間にか手に取っていた様子の本を、はいとわたしに渡す。

「あええ……？」

「続き、読むんだろう？　ここで読むといいよ」

「ほ、う……？」

どこまで読んだのかなと呟きながら、そしてわたしの体を横から腕で囲んだまま。

ペラペラとページを捲るおにい様に、思考停止したわたしは疑問符を飛ばすばかり。

「……あんまりぼんやりしてると、ちゅーしてしまうよ？」

「ひゃえっ!？」

ちゅーしてしまう、とは——

幼い頃は毎日のように口にされていた、そのちゅーだろうか。

それは流石に、恥ずかしすぎる。

大きくなった今にそんなことをされてしまったら、わたしは羞恥心で燃え尽きてしまうだろう。

「あわ、あうっ、つづき、続きい……っ」

「ははははっ」

頭にスリスリとされながら、手渡された本のページを急いで捲る。こめかみに唇が押し当てられて、軽く肌を吸われる感覚と共にちゅ、と音が鳴った。

「ちゅーはいつでもしてあげるからね。してほしくなったら、言うんだよ？」

「くくくっっ」

肌に口付けたままそう囁きかけられて、ボフツと自分の頭から音

が鳴る幻聴を聞いた。

きつと今のわたしは、耳だけではなく首まで真っ赤だろう。

薄い布地のシンプルなワンピース。その上からすり、と左の太ももが撫でられて、大きな手が太ももと膝までのラインを往復する。

「可愛いねえ……♡ふふ、もう、食べちゃおうかな？」

「ひう、うう……」

すりすり、すりすり。膝小僧までもが丁寧に撫でられ、おにい様の手の熱さにじんわりとお腹の奥に熱が蓄積していく。

何とも形容しがたいこの感覚は、何だろう。

わたしは全身にじつとりと汗を掻きはじめ、自然と息が上がった。

「君もそろそろ、十八だもんね。ちよつとくらい予定が早まって

——父上はまあ、怒るだろうけど。母上は……うん、もっと怒るだろうけど。バレなきや、問題ないよね」

「はええ……?」

羞恥心からじわじわと湧き出てくる涙を、べろりと舐め取られた。キャパシティを超えたことが立て続けに起こり、わたしの思考回路は完全に停止する。

「もしバレたとしても、この際既成事実を作ってしまったほうが、二人の気持ちも決まると思うんだ。ほら、良いことづくめだろう?」
「え、う??」

同意を求められても、頭も視界もグルグルしていてよく分からない。ひたすら疑問符を飛ばしながら混乱しているわたしに、おにい様はクスツと笑った。

それからわたしの頬に一度口付け、間近から瞳を覗き込む。

「ね、これから俺の部屋に行こうか。ちよつと恥ずかしいことをするけれど、皆には内緒にしてね? 大丈夫、悪いことじゃないよ。単

に近い将来の、予行演習みたいなものだから」

「え……？ ええ……？」

体のあちこちを撫で回され、口の端に何度も口付けを落とされて。ひたすら混乱を極めるわたしに、おにい様はずっと上機嫌に話しかけ続ける。

（お——おにい様の、部屋）

それは、わたしが十二歳になった年から、立ち入りを禁じられて
いる場所だ。

おかあ様からは、『ルドラに唆されても、絶対に足を踏み入れてはいけません。強い意思を持って、自分の身を守りなさい』と口を酸っぱくして言われてきた。

あまり意味が分からなかったが、六歳という幼さで両親を事故で喪った、そんなわたしを快く引き取ってくれた義両親だ。

亡き友人の遺した子供であるわたしのことを、実の子供のように育ててくれた。

そんな実の両親の友人夫妻——つまり今のおとう様とおかあ様の言いつけは、守りたい。

だからわたしは、おにい様の提案に否と首を横に振った。

——すると何故だか、こちらを見つめる青の瞳が、どろりとした熱を纏う。

「——じゃあ、ここでしちやおうかな？」

「え……!？」

着ているワンピースの裾が、するりと捲られた。

あわや膝が見えてしまう寸前、というところでわたしは慌てて手で押さえる——が。

「んん……っ!？」

「ん……♡」

顎を掬われ、ちゅう……♡と唇を吸われてしまった。

「ん、ん……♡んー、ふふ♡」

「……っ!?……!?」

唇を熱い舌にぺちや、くちゅっ♡と舐められ、かと思えばちゅうちゅうと吸われる。

ポカンと薄く開いた口の隙間にすらも、やたらと念入りに舌を這わされていった。

「ひう!?らっ、め……!ら、んむう!?」

唇を合わせたまま、おにい様の右手がするりとお尻を撫でた。

目を白黒させながらも止めさせようと手を伸ばせば、開いた口の間に熱くてぬめったものが入り込む。

「ん、んむっ♡むうっ、ふ……♡」

口内に舌を挿じ込まれ、粘膜をねちねちと舐め回されている。その上でわたしは大きな手でねっとりとお尻を撫で回されていた。

反対の手は足の付け根部分の際どいところを撫でたり、内腿を擦ったりと、ずっと悪戯をしている。

「ひっ、う♡んあっ♡ふう、ふう……♡」

「ん、可愛いね……♡もっと、してあげる」

右膝を横に押されて。大きく開脚したその中央に、おにい様の不埒な手が近づいてくる。

ワンピースのスカートはとうに捲れていた。

このままだと、彼の手が下着に触れてしまうだろう。

「おにい、様っ！だめ……っ」

「君こそダメ、だよ。こういう時は、ちゃんと名前で呼ぶんだ。ほら、ルドラって呼んでごらん？」

ちう、と目尻に口付けを落とされ——ああ、指が触れてしまうと強く目を閉じた瞬間。

「——ぼっちゃま!!」

ドアが豪快に開かれる音と、耳をつんざくような怒号が響き渡った。

* * *

軟らかいふくよかな体に抱き締められたまま、わたしはガミガミと叱る声を聞く。

怒られているのはわたしではない。

今、床に正座をしているおにい様だ。

「あれほど、旦那様と奥様から厳しく言いつけられていたでしょ

う！それなのにこうして節操なくお嬢様を襲うだなんて！ばあやは嘆かわしくございます！」

おにい様の乳母であり、侍女長として長年この屋敷に勤めているばあや。わたしもそうなのだが、おにい様はこの方にてんで頭が上がらない。

「いや、だってね……」

「だってではございません！」

こっぴどく叱られて、おにい様が図書室の硬い床の上で小さくなっている。

——可哀想に。

男性は、そういった衝動に抗い難いと聞く。

特に若い体だとそれが顕著で、おにい様はきつと、身近な女の体にちよつとだけ、我慢が出来なくなっただけなのだ。

これは、わたしのせいでもある。

わたしが、おにい様に心を許しすぎてて、何をされても怒ることが出来ないから——だからこの結果を招いたのだ。

「ば、ばあや、わたしは大丈夫よ。は、恥ずかしかったけれど……嫌だったわけでは、ないから」

「そういう問題ではございません！」

ピシヤリと叱られて、わたしはしょんぼりと肩を落とした。

それは、そうか。未来の侯爵様が、同居している義理の妹に手を出すなんて、醜聞が過ぎるだろう。

彼がいつか迎える奥様にも、申し訳が立たない。

（おにい様の、奥様……）

こんなに仲良くしてもらえるのも、きっと今だけだろう。

おにい様が婚約者を迎え、その後結婚したら。

わたしはおにい様の奥様のためにも、あまりおにい様と関わるべきではない。

ちゅーなんて、もつての他だ。

わたしはそう遠くない未来を想像して——どんどん、気持ちがい沈んでいった。

——そうして思考が悪い方へ悪い方へと流れていく中で。ついにはほろり、と目から涙が零れてしまった。

それを目撃した二人が、途端に慌て出す。

「あ、あ、どうしたんだい？ ごめんね、怒られているのは君のせいじゃないから」

「お、お、お嬢様？ 大丈夫ですよ、そんなに大事ではありませんから。ただ、ぼっちゃまが我慢出来ないのが悪いのです」

二人を焦られているのが忍びなく、違うのと答えたいのに胸が詰

まっつて言葉が出ない。

立ち上がり、駆け寄ってきたおにい様がホロホロと零れる涙を親指で拭ってくださる。

お礼を言つて、それから謝つて。何でもないと言いたい。けれどやっぱり、何かが喉につつかえたように言葉は出来なかつた。

わたしは、昔からずつとこうだ。

もう十八歳になるというのに、情けない。

儘ならない自分への苛立ちや悔しさも相まつて、感情の高ぶりが一向に治まらない。ごめんなさい。迷惑をかけたいわけじゃないの。

「ああっ、そうだわ！この事は旦那様にも、奥様にもお話ししませんから。ばあやの心に仕舞っておきます。ねっ？お嬢様」

おにい様に頭をなでなでされながら、未だわたしのことを抱き締めてくれているばあやが宥めてくれる。

わたしは泣いている内にどうにか気持ちが落ち着いてきて、コクンと小さく頷いた。

それでもまだ、涙は溢れて、言葉が出ない。

つくづく自分が、嫌になる。

「おいで」

見かねたおにい様が、緩く微笑んでこちらに腕を開いて下さった。ばあやの腕が緩み、わたしは誘われるようにしておにい様に近付いて行く。

そうしてわたしはおにい様の逞しい腕にふわりと包み込まれて、優しく優しく、抱擁された。

「大丈夫、大丈夫。ほら、深呼吸を繰り返して」

「う、ん……」

言われた通りに深い呼吸を繰り返せば、顔を埋めたシャツから、

コロンとおにい様のかおりがする。

すり、と頭に頬擦りがされ、ばあやがわたし達から距離を取ったのか気配を消した。

「怖いことも、嫌なことも、何もないよ」

「おにい、様……」

大好きなおにい様のかおりとぬくもりに包まれて、苛立ちや悲しみが遠ざかっていく。

いつだって、わたしを包み込んでくれるおにい様。

血は繋がっていないけれど、わたしのことを昔から、実の妹のよう
に可愛がってくれた。

幼少期など常に後ろをついて回って、何かあればおにい様の後ろ
に隠れていたのに。煩わしそうにしたことなど、一度もない。

それどころか、やたらと話しかけてくる同年代の男の子からは、

いつも守ってくれていた。

「ありがとう、おにい様。もう、大丈夫……」

胸板を押して少し距離を取れば、緩く微笑む顔が上からこちらを見下ろす。

「そう？俺としては、まだこうしておきたいんだけど」

冗談だって、お上手だ。

ついわたしがクスリと笑えば、ひょいと右だけ眉が上がった。

「本気だよ？」

「ふふ、ええ。おにい様はいつだって、本気ですものね」

口許に手を当ててクスクスと笑い続ければ、おにい様の目元が優しく垂れる。

平常時でも、ちよつと垂れ目がちな青い双眸。わたしはこの二つの目がこうして更に垂れる瞬間を見るのが、昔から好きだった。

「そろそろ、おやつ時だね。庭でお茶でもしようか」
さりと手で髪を梳かれて。悪戯の計画をするように楽しげに、
語りかけられる。

薄暗い室内でも、青の瞳がきらりと光って見えた。

つかの間わたしは、その輝きに目を奪われる。

一瞬遅れて見惚れていたことを自覚すると、じんわりと頬に熱が
集り出した。けれどわたしはにつこりとおにい様に、笑い返す。

「はい、おにい様」

大きく頷くと、穏やかな表情で頷き返してくれる義兄。

少し離れた場所からは、ホツと安堵の息を吐き出す音が聞こえた。

2. おだやかな日常にやって来た異変

この国では、大多数の貴族が十六歳の年にデビュタントを迎える。けれどわたしは内気な性格や、実の両親が既に他界していることもあって、十八歳になってからデビュタントを迎えることになっていった。

よって来年の春に、わたしは社交界デビューをする。そしてそれからは、夜会やお茶会で他の家の貴族達と交流を深めていかなければならない。

これまでは実の両親や義両親、そして義兄や使用人達と、優しい人ばかりに囲まれてきた。

幼少期にはホームパーティーなどもあったが、そこでおい様の後ろに隠れて常にビクビクしていたからか、いつからか開催される

頻度が落ちた。そして、どうしても人を集めなければならぬときは部屋で大人しくしているだけでよくなったのだ。

義理の両親から役に立たないと判断されたわけではない。

おとう様とおかあ様は、辛い思いをした上にずっと不安を抱えて社交の場にいるのは、幼い心に大きなダメージを与えてしまうと判断してくださったのだ。

（そうそう、その頃と言えば——うっ！）

不意に幼少期と言えば——と連想をして、今のわたしの心にダメージが入った。

いつもわたしがベツタリと引っ付いて追いかけて回していた、おにい様。幼少期のわたしはしきりに、彼に何と言っていたか。

——そう。幼い少女にありがちな、『大人になったらお嫁さんにしてください』だ。

（——ううっ！）

またしても、今のわたしの心にダメージが入る。

ああ、『いいよ』と答えてくれたおにい様の優しさよ。

聞き分けの無い子供を納得させるための言葉だと分かっているが、
そこで『いいよ』と言える優しさよ。

（ありがとう、おにい様……）

お陰でわたしは今日まで、こんにち明確な失恋をしていない。

淡い恋心はもう、すくすくと育って淡くはないけれど。それでも
ヒビが入らず大事に仕舞っておけている。

さて。少し逸れてしまったが、そんな優しい義両親のお陰で、わ
たしはこれまでこうして、安全な屋敷の中でぬくぬくと育ってきた。
だがその弊害として、もうすぐ十八歳になるというのに知らない
人が少し怖い。

でもデビュータントを初め、色んな社交の場にはおにい様が同伴してくれると言う。だから、きっと大丈夫だ。

（ここまで育ててくださったおとう様とおかあ様のためにも、いい人に見初めていただけるように頑張らないと）

周りより二年も遅く、社交界デビューを果たすのだ。

男性は女性が若ければ若いほど魅力を感じると聞くし、わたしは婚約者探しに難航するかもしれない。

だから良縁を結ぶためにも、器量の良いところをみせなくては。

そのためには、もしドレスの下で生まれたての小鹿のように膝が震えていようと——せめてもおにい様の後ろに隠れるようなことはしないようにしなきゃ、と。

わたしは今日も、握り拳を作って夕日に誓う。

そして過去の恥ずかしい記憶には、厳重に蓋をした。

* * *

一人掛けのソファに座り、自室でのんびりと刺繍をしていた午後。廊下へ繋がるドアがコンコンとノックされて、わたしは顔を上げた。

見て参りますねと声をかけてくれた侍女にお礼を告げて、傍らにある丸テーブルの上に刺繍セットを置く。

ドアの向こう側から、微かにおにい様の声がした気がした。

ドキリ、胸が高鳴って。右手が勝手に髪の毛を梳く。

意識する前に体がドアの方に向いて。それを遅れて自覚したわたしは、自分自身に呆れて少し笑った。

ドアが開き、おにい様の姿が視界に映る。

すぐにわたしを見つけたおにい様は、にこにこしながらわたし

に手を振った。

何やら上機嫌に見えるその様子にわたしは首を傾げながらも、胸の前で手を振り返す。

（え……？）

おにい様と二三言話した侍女が、部屋から出ていく。そしてそれに入れ替わって、おにい様が入室した。

真っ直ぐこちらに向かってくるおにい様は遠出をしていたのか、乗馬服を見に纏っている。

その姿も大変格好が良い——では、なくて。わたしがおにい様の自室への入室を禁止されたと同時に、わたしの部屋におにい様が来る時は侍女が必ず傍に待機する決まりになっていたはずだ。

それなのに、おにい様がパタンとドアを閉じてわたし達は室内に二人きりになってしまった。

真面目で勤勉な彼女が、それを失念するとは考えられない。

何か、急用でも出来たのだろうか。

いや、もしそうならばおにい様は部屋に入っては――

「やあ、邪魔してごめんね」

「い、いいえおにい様。あの、その」

すぐ傍までやってきた彼を見上げ、まずお帰りなさいと言うべきか、場所を変えようと言うべきか悩む。そうしていると、座ったままのわたしへおにい様が、ずいっと顔を寄せてきた。

右側の肘掛けにおにい様の左手が乗り、わたしは距離の近さに目を剥く。

「ふふふ♡この世は本当に、不思議で満ちているよねえ」

「えっ？何の話……？」

突然よく分からない話をされて、わたしの頭上に？が浮く。

そんなわたしを見つめて、おにい様はまた「ふふふ♡」と笑った。
「ああ、可愛いなあ……♡ほんとうに、可愛い。ねえ、俺をどうしたいの？」

「ええ……？」

どうしたいのも何も、わたしは何もしていないのだけど。

左耳の傍で低く囁かれながら、わたしはピクピクと体を跳ねさせる。

「ん……。君の、においがするね。知ってる？俺はね、昔から君のにおいが大好きなんだ」

「や……っ！」

首筋に鼻を埋められて、クンクンと体臭を嗅がれている。

イヤイヤとかぶりを振っても、やめてくれない。

「おにい様、やめ……っ！」

距離の近さにも、彼の行動にも。流石に耐えきれなくなつて慌て立ち上がろうと足腰に力を入れれば。

「——えっ？」

何故かするんと足が滑り、椅子の背で頭を打つはずが、却って体が前に倒れていく。

「……っ」

「きゃあぁッ！」

目を丸くしたおにい様のことも巻き込み、明らかに生じた力より大きなものを纏つてわたしは前に倒れていった。

やがておにい様はドスン、と絨毯の上に尻餅をつく。そしてそんな彼の膝の上に座るようにして、わたしの体の暴走が止まった。

「っっ？……っ？」

一体、何が起こつたの？と目を白黒させていれば、そっとお尻に

手が触れる。

二つの手がドレスの上からゆっくりとその左右の小山を撫でるが——わたしは彼がわたしの体を、支えてくれているのだと納得した。

「んっ♡ん、ん……っ」

ゆさゆさと揺れるおにい様の体。

開いた足の間——つまりはスカートの下の、下着越しに触れているおにい様の体の一部が、みるみる内に硬くなっていく。

「おにい、様……？」

「ん？ふふ……♡」

これは、何ですか？と視線で問うてみても、返ってくるのは意味深な笑みのみ。

ゴリ、ゴリ……♡

「ふぁ、あ、んっ♡」

ガチガチに硬くなつたものが、彼の着ている服と、薄い下着の上から秘裂を擦る。

こんなところを——不浄の場所を。例え下着越しとは言え、おに様に触れさせてしまうなんていけないと思うのに。次第にぬるぬるとし始めたそこから、何とも言えない感覚が生じて制止の声が出なくなる。

「ねえ、こっち向いて？」

「んっ？ う、あんっ♡は、いっ♡」

低く、しっとりとした声に耳元で囁かれて、わたしは俯けていた顔を上げた。そうすれば、思いの外至近距離にあつたおに様の顔。顔を上げた勢いが良かったからか、透き通る海のような瞳が軽く見張った。しかしすぐにゆるりと笑みの形をとり、まっすぐわたしの瞳の奥を覗き込む。

「……っ♡♡」

ドクンと鼓動が跳ねて、うまく頭が働かなくなった。

大好きな——昔から、大好きな人。

感情に支配された体がすり、と目の前のしつかりした体に擦り寄れば。彼は頬を緩めてわたしを受け止めてくれた。

「あっ、んン……っ♡」

一際ビリビリする場所が擦れて、わたしはおにいやと目を合わせたまま、ハクハクと唇を震わせた。

可愛いねとまた囁かれて、頭が真っ白になる。

ちう、と優しく唇を吸われて、キュウツ、と切なくお腹の奥が、疼いた。

ドレスの中に忍び込んだ彼の手がもちもちとお尻の肉を揉んで、柔らかな唇が顔中に口付けの雨を降らせてくる。

「床の上じゃアレだから……ベッド、行こうか？」

「はい、おにいさま……♡」

完全にされるがままになっていたわたしは、おにい様の言葉に大人しく頷いた。

ゴリゴリとされていた足のあわいから硬いものが離れていき、あつという間に横抱きにされる。

「あ、ん……♡あふ……っ♡」

「ん……♡はあ、あつ……」

シャツの首元を緩めながらもわたしに口付けを送り、おにい様はどさりと寝台の上にわたしの体を下ろした。

それからおにい様は珍しく慌てたように上着を脱ぎ捨て、シャツのボタンも外していく。

その間わたしはドキドキとしながらその様子を見守り、次第に露

になっていく肌に、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

「さあ、脱がせてあげる」

引き締まった上で、きっちりと筋肉を纏った肉体美。

その光景に見惚れていると、彼の手がこちらに伸びてくる。

「あう……」

室内用のゆったりとしたドレスにはコルセットもなく、着せやすければ脱がせやすい。器用な彼の手にかかれば、簡単に剥いでしまえるだろう。

「あっ、まっ」

「うんうん、大丈夫だから。俺に任せてね？」

腰で結んでいるリボンをほどかれ、するすると脱がされていけば
どんと身に纏う衣服が減っていく。

そうして狼狽している内に、わたしはあっという間にシユミーズ

と下着だけの姿にされてしまった。

ポイポイと床にあらゆる衣服を投げていくおにい様に、普段の余裕は無い。

何をそんなに急いでいるのだろうと、わたしは首を傾げた。

「あつ、それはだめ……！」

「んー？」

シュミーズの裾を掴まれて、慌てるが——にっこりと笑ったおにい様が首を傾げると、抵抗する気持ちがどんどん萎んでいった。

おかしいと思うのに、何故だかあまり抵抗が出来ない。

恥ずかしいけれど、嫌ではないからだろうか。

ちゅっ♡と優しく唇に口付けられた後、わたしはシュミーズすらも剥ぎ取られてしまった。

「ああ……夢にまでみた、君の体だ……」

「っ、っっ」

羞恥で真っ赤に染まる体を、じつくりと、舐めるように――観察されている。

視線を受ける度、肌が燃えるように熱くなった。

「ありがとう。……ふふ、お礼を言うのもおかしいけれどね」

「いえ、……ん」

顔を寄せられ、すり、と頬に頬を擦り付けられる。

間近でわたしの瞳を見つめる青は、熱に浮かされたような色をしていた。

「――愛しているよ。心から、君だけを」

「はい、おにい、さま……」

そっと押し倒されて、覆い被さられる。熱を持った素肌同士が触れ合って、またほんのりと頬が熱くなった。

何度も軽く唇が触れ合っている内に、頭がぼんやりとし出す。

家族愛？それとも……。

一瞬チラリと過った思考は、桃色の霧で見えなくなった。

舌と舌が絡み合い、大きな熱い手が体をまさぐる。

「ルドラって、呼んで？」

「ん……、るどらさま」

互いの口からくちゅくちゅと音を立てながら口付けを交わし、胸当ての上からふにゅふにゅと左乳房を揉まれる。

こんなに深い口付けも、こんなに露骨に乳房に触れられるのも、初めてのことだ。けれど決して、嫌ではない。

ただ、ドキドキと五月蠅い鼓動が彼に伝わらないかが、気がかりだった。

「あ……っ！」

「ん……」

足の間の泥濘む場所を下着越しに撫でられて、ビクンと体が跳ねた。つい離してしまったわたしの口許に、青い瞳が不服そうな視線を送る。

「だめ、お口はこっち」

「あ、んん……っ♡」

パクリと口を食べられて、熱い舌で口内を探られる。

すぐに見つかったわたしの舌は、ペロペロと執拗に舐め回された。

「——ふ、きやあ、あっ！」

「ああ、すごいな……。熱い……」

不意に下着がずらされて、彼の指がくちゆりと割れ目を撫でた。

そしてほんの少しだけ、指先が中に沈み込む。

「んんっ、んっ♡んう、あん……っ♡」

口内の至るところにゆったりと舌を這わされながら、下ではくぷくぷと音を立てて浅いところが擦られる。

おにいは様はわたしに口付けを送りながら、こちらの反応をよく観察していた。

そして大丈夫そうだと悟るともう少しだけ大胆に、指を動かす。

「あっ！ふあ、ああっ♡はいって……♡」

「ん……、力んではだめだよ。力を抜いて……？」

唇を触れ合わせたまま、そっと注意される。

ぬちぢぢ……♡と奥深くまで中に入り込んだ指は細長く、優しい手付きで内壁を撫でていた。

「ん、んっ♡ちから、ぬく……っ」

「そう。いい子だね」

くちゆくちゅと膣内を掻き混ぜられながら、わたしはしつとりと

した声で褒められた。

ゾクゾクと背筋を駆け昇るのは、快感だろうか。

ふるふると小刻みに体が震え、自然と頭が左右に揺れた。

「こーら。キスは、やめないの」

「れ、もお……っ♡あっ、あっ！」

唇を追いかけてくるおに様の顔を、そんなつもりなど無いのに避けてしまう。

ゆうつくりと前後する細長い指が、狭い膣内の肉ひだをねつとりと繰り返す撫でていた。

慎重な動きなのに、初な内壁は鋭敏過ぎるほどに与えられる感覚を拾い集める。そして苛烈なほど、強く反応するのだ。

「ん、ん……？ 敏感、過ぎない……？」

「はっ、んんっ♡あ、うんっ♡」

「ううん、どうなんだろう」

ゆるゆると中を擦りながら、おにい様が心配そうにこちらの顔色を伺ってくる。

心配させてしまつて申し訳ないが、わたしとしてはそれどころではない。なので、体を跳ねさせながら喘ぐだけだ。

「ごめんね、俺——実経験が無いというか、閨教育も座学だけにしてもらつたから……うーん、辛かったらきちんと言うんだよ？」

「ふあ、いっ♡あ……っ！んっ♡♡」

浅いところをお腹側に押されると、一際大きく快感の波がやってきた。ビクビクと勝手に体が跳ね、脳内が白く霞む。

そんなわたしのことを見つめながら、おにい様は何やら思案している様子だ。

「もしかして……これも、『ラッキースケベ』の一部なのかな？」

「あっ♡そこっ♡ひあ、あああっ♡」

ラッキー……何だ？と一瞬チラついた思考が、強い悦楽で流されていく。

ぐちゅぐちゅと自分の下半身から鳴る水音と、胸元で度々鳴るリッポ音。

恥ずかしい音で性感が高まったところでしつこくイイ場所をゴリゴリされて、わたしは「もうだめ」と限界を訴えた。

「……イツちやいそう？すごいね、初めてなのにな？」

「あああっ♡あーっ♡い……っ？イツ、ちやつ？」

聞き慣れない言葉を問い返せば、ウンウンと頷くおにぃ様が嬉しそうに破顔する。

そのままズイツと顔を寄せられて、わたしはぼやけるほど近くで、青色を見つめた。

「本当にもうだめーってなったら、イクイク♡って、言うんだよ？」

「い、くイク♡……？」

これでいいの？と言外に問いかければ、また嬉しそうに首肯された。

ビクビクと腰が跳ねる間隔が短くなり、立つ水音も激しくなる。ぐしゅぐじゅと鳴る音が恥ずかしいのに、重く甘ったるい熱がお腹の奥で燻っていた。

「いくっ♡もう、イク、イク♡……っ♡」

「っ、うん……♡イッて……？俺の指で、イクイク、して？」

わたしの口の端に口付けながら。おにい様はぬるりともう一本、中に指を入れた。

太くなった栓で内壁がズリズリと擦れ、いいところがよりゴリゴ

リされていく。

「ふっ、イツ♡♡ヅッ、んゝゝっ♡♡」

「はっ、あー……♡イツちゃった……♡」

当然、強まった刺激に耐えられるわけなどなく。

ペロペロと唇を舐められながら、わたしは熱を弾けさせた。

「ふふ、ふ♡中、すごいね……♡達したことで、ぎゅうって、俺の指を締め付けてる」

「ああ、あッ♡や、あ……っ♡」

ヒクヒクと戦慄く場所を、ねっとり前後に撫でられている。

『イク』または『達する』――

それが、この大きな衝撃の名前なのだろう。

そう言えば、性感が高まると『絶頂』ということをすると言ったことがある。

きつとこれが、そうなのだろうと。未だに唇を舐め回されながら、ぼんやりとわたしはそんなことを考えていた。

口の周りに、熱く湿った吐息がかかる。

おにい様は、とても興奮している様子だ。

とても息が荒い。それでもって夢中で、わたしの中を撫でている。

「そろそろ、いいかな？イクことが出来たし……いれちゃおうか」

「いれ……？」

もう既に中に、指が入っているのに？と首を傾げると、頷いて肯定される。

ちゅぷ♡ちゅぷ♡ゆったりと摩擦される蜜道は、相も変わらずキユンキユンと蠢いていた。

「本当はたっぷり口で味わいたいんだけど……我慢が、できないから。それはまた今度、させてね」

「う、うん……？」

口でと言われると、そこに口付けられるのかと、思ったが。

まさかそんなわけないよねと、疑問に思いながらもわたしは自己完結した。

だって、排泄に使う場所なのだ。

そんな場所に、おにい様が口を付けるはずがない。

「――？」

わたしが考えを纏めている内に、おにい様が体を起こした。

今は寝台の上にペタンと座り込んで、濡れている手をジッと見つめている。

わたしがそれを気恥ずかしく思っていると、少しだけ逡巡して。どういった思考に至ったのか、おにい様は濡れているその指を、パクリと啜えてしまった。

「……エッ!? ……ええっ!」

その指はつい今しがたまで、わたしの体内に埋まっていたものだ。当然、付着していたのはわたしが分泌したもので――

「ん、ちゅ……ん……♡♡♡」

見慣れた整った顔が、うっとりと蕩けて。わたしの目前で、彼自身の指をねぶっている。

信じられないその光景に、わたしは言葉を失った。

しかし、何も視ていなかった青い瞳が――わたしを捉えた瞬間。

わたしは大袈裟なほど、体を跳ねさせてしまった。

「ごめんね、つい夢中になってしまっていたよ♡」

「は、う……」

ちゅぷりと彼の口から抜き取られた指は、今や彼の唾液で濡れている。それを見てしまったわたしは、そっとそこから視線を外した。

「さ、続きをしようね」

「え、……あっ!？」

未だ狼狽していれば、膝頭に手を乗せられてあっという間に開脚させられてしまう。

「きゃあ……! だめ、おにい様……っ」

沢山触れられて蕩けた場所が、彼の目に映ってしまう。

そう焦って右手を下に伸ばすが、視界の端でおにい様がムツと口角を下げたのが見えて、動きが鈍くなった。

「ルドラ。そう呼んでって、言っただろう？」

「え？ は、はい、ごめんな……きゃああっ!」

そんなに呼び方に拘るなんて珍しいなと思いながらも素直に謝ろうとすれば。

ガバリと大きく足を開かされて、動揺している隙に足の間に体を

振じ込まれる。

「え……っ？おにつ、ルドラ、様……？」

下半身同士を近付けたこの体勢に危機感が募り、おずおずと顔を見上げれば、にっこりと笑いかけられる。

「ンッ、んんっ♡あ、ん……？」

おにい様が右手を動かす度に、濡れた割れ目に熱くて硬いものがぬるぬると擦り付けられる。

いよいよ本格的によくない気がして。慌てて上にずり上がろうとすれば、左手でガツシリと腰を掴まれた。

「入れるよ♡」

「ま……っ！あッ」

ぐち、と押し当てられて、更に力を加えられた熱塊。

パクパクしている入り口を押し拓いて、体内へと侵入する。

「あっ！あ、やら、おっきい♡♡♡」

「っ、ふーっ、く……っ♡」

ゆっくりと前後しながら少しずつ中に入ってくるものを、わたしはぎゅうぎゅうと締め付ける。

痛みはないが、迎え入れているそれがずっしりとした質量のものなので、お腹が苦しい。

わたしの中もかなり狭いのか、おにい様は動き難そうにしていた。そうしてそれから暫く、互いに違うものと格闘していれば——苦しそうに呻いたおにい様から、パタパタと汗が降ってきた。

「ん、うっ♡あ、ンッ♡はっ、るどら、さまっ、苦しい……？」

「ん……？」

見上げた先にあったのは、苦悶の表情。

きつとわたしが彼の体の一部を、ギリギリと締め上げているから

だ。そう気付いて、途端に申し訳なくなった。

そこを緩めたいのに、灼熱の棒はとても大きくて。わたしの中は、ギチギチになっていた。

「いいや、大丈夫だよ」

ふにやりと眉尻が垂れて、少し困ったように笑ったおにい様。

まるで仕方ないと言わんばかりの表情に、わたしは首を傾げた。

「気持ちが、いいんだ」

「それなら、どうして……」

そんな風に困った顔を？と問いかければ、今度は彼から「ははっ」と快活な笑い声が漏れた。

「君が、自分のことより俺のことを心配するからだよ。今最も辛いのは、君だろうか？」

「それ、は……んんっ♡♡」

いいところが擦れて、膝裏を押さえられている足の先がビクビクと跳ねる。

尚も汗を掻きながら、おにい様はその場所に狙いをつけた。

「そこっ、やっ♡あああっ♡♡」

「ふふっ♡ほら、君の方が大変だ♡」

途端にニコニコし出した彼が、反応を示した場所を集中的に擦り上げる。

しかし数度それを繰り返したあと、おにい様は急に表情を引き締めた。

「……ねえ。良さそうというのは分かるけど……痛みはないかい？」

問いかけておきながら、感じる場所を頻りに擦るおにい様。

更には入り口付近のいいところもゴリゴリと抉られて、答えないのにわたしは言葉を失ってしまふ。

「らいっ、らい、じょおっ♡♡おおッ♡♡おーッ♡♡♡♡」

少しずつ、少しずつ。わたしの様子を見ながら、着実に。

ずんずんと突き進んでいく熱塊が、お腹の奥深くまでをも満たしていく。

「ほんとかなあ？」

「ほんっ、あああッ！やだ、そこいやって——ア、あ、あ……！」

一度は通り過ぎたイイ場所を、ずるりと後退した肉杭の先端で擦られる。

ゾリ、ゾリ……♡あまりにも気持ちが良いすぎて、腰から下が溶けてしまいそうだ。

「君は他人の痛みや苦しみには敏感なのに、自分のことになると途端に鈍くなるからさ」

「んいっ♡♡も、も、いっ♡♡」

もう、イクと言っておきながら。

そう根をあげた次の瞬間には、頭が真っ白になった。

「くくくっっ♡♡♡」

「あー♡♡ごめんね♡ほんとうに、よかったんだねえ♡♡」

謝っておきながら、おに様は絶頂に打ち震えるわたしの体を、更に追い込んでいく。

脳内を白く霞ませたままわたしは意味を成さない声を上げ続け、終わりの見えない快樂の渦に飲まれていった。

「ふふ、おに様のおちんぽで、上手にイけたねえ♡♡♡えらいえらい♡」

よしよしと褒められながら、優しく頭を撫でられる。

それでも体内では相変わらず、大きなものがズリズリと内壁を擦っていた。

ぐじゅ、ぐじゅ、と——絶えず自分のお股から、ねばついた音が鳴り響く。

「——ひんッ！お、おお……ッ♡♡」

「ん、行き止まりかな……？」

とうとう先端が、とちゅん♡と行き止まりに触れた。

確認するように二度、三度とそこを突かれて。突き抜けるような大きな快感に襲われたわたしは、ぷるぷると震えながらかぶりを振った。

「ふふ、すごく良さそうだね……♡」

「ちが、おッ♡♡ひ、んッ♡しよこっ♡いやあっ♡♡」

ずん、ずんと。一番深い場所を押し上げられて、視界が明滅する。行き止まりの先にある小部屋がぐじゅぐじゅと押し潰されて、苦しくも甘い快感が、身体中を駆け巡った。

「うん♡たくさん、よくしてあげるからね♡」

違うと、嫌だと。そう、言っているのに。

眉根を寄せて、また滝のように汗を掻きながら、おにい様は前後に腰を揺すり続ける。

わたしの体も、既に汗まみれで。触れ合う肌がぬるりと滑っては、その熱さで更に発汗し潤った。

「あー……すごい、感無量だ……♡ふふふ♡あの魔女だと名乗った不審者には、感謝をしないとね♡」

「お、おッ♡♡おッ♡あーっ♡♡」

延々と叩きつけられる腰のせいで、触れ合う肌がパンパンと音を立てている。

濁った声を漏らす口は、開きっぱなしになっていて。その下唇に、おにい様が吸い付いた。

「可愛い♡♡すき♡♡ずっと、一緒に、んちゅ♡♡いようね♡♡大好きだよ♡♡」

「ひうう……！アツ、あつ！わたし、も、しゅきい……っ♡♡♡♡」
ゴツゴツと行き止まりをノックされて、身悶える。そんなわたしは顔中に口付けの雨を降らされながら、着実に昇っていった。

「おにい、さまっ♡おにいさまあっ♡すきなっ♡♡」

「もう、名前で呼んでって言ったのに……仕方がないね♡」
自覚の無いまま、気持ちを吐露して。そんなことはとつくに知っていたとばかりに頷いたおにい様は、それでも嬉しそうに笑み崩れていた。

「ごめ、なしゃっ♡あああっ！」

突き入れる角度が変わったのだろうか。入り口近くのイイ場所が——剛直の根元付近でごりゅごりゅと苛烈に擦れている。

ビクビクと痙攣する体におにい様はのしかかり、更に腰を振りたくる。

「あーっ！あぁッ、あゝ……っ！」

「いいよ。可愛いから、許してあげるっ」

話し終えるなり、わたしの顔の横に手を突いて。体勢を整えるなり、素早く律動を繰り返すおにい様。

上からジツとこちらを見下ろしてくる視線は、熱く、絡み付くような執拗さを孕んでいた。

「るどらっ、ルドラ……ッ！」

「うん、っ、ああ……っ」

性感が高まる内に、堪らなくなつて何度も名前を呼ぶ。そうすれば、彼も負けじとわたしの名前を呼んでくれた。

自分の下半身から聞こえてくる水音が、より顕著になつて。次第

に脳内が白く、霞み始めた。

「ああっ、あッ！ヅ、う、ああ、もう……!!」

ついにすぐそこまで迫り来た限界。

ぐちゅぐちゅと膣壁を執拗に撫でられながら、わたしは背を弓形に反らした。

「くくくッツ!!も、い、くう……!!」

「っ、俺も、もうっ、出る……!」

切羽詰まったように話すおにい様も、わたしと同様に酷く息を乱していた。

彼が繰り返す律動が遠慮の無い激しいものに変わり——与えるための動きが、求める動きに変わった。

「イクイクイク……!! イッ——ん、ううくくくッ♡♡♡」

「あっ、くう……!」

高まりに高まった性感が弾け、お腹の奥から全身に快樂の波が駆け巡る。

途方も無い多幸感。その中で、お腹の奥まで埋め込まれていた熱が、ズルリと勢い良く抜け出した。

「おッ♡♡♡」

「はっ、はーっ、まに、あった」

ビュクビュクと、お腹の上に熱いものが吐き出される。

すぐに冷たくなってしまうその液体は、本来なら中で受け取るものなのだろう。

外に吐き出されることに、わたしは無性に寂しくなった。

「おにい、さま……ん、ふう……♡」

「ん、ごめんね、汚して」

互いにまだ、はあはあと息を乱しながらも。おにい様は床から彼

の下着を拾い上げた。

そして、それを使って白濁とした液体を綺麗に拭いとってくれる。

「……、……」

「……？おにい様？」

様々な体液で潤みに潤んでいるそこも拭おうと、手を伸ばしたところでおにい様は何故だか、動きを止めてしまわれた。

あらぬところを、じいっと見つめられている。

お目汚しを……と声を上げようと口を開くが、注がれる視線があまりにも熱い。

ついに耐えかねて、わたしは何も声を発することなく口を閉じた。そして丁度その瞬間。彼の青い瞳がこちらに向いて、気まぜく思っていたわたしと視線を交わらせた。

「ねえ、もう少し……付き合ってくれるかい？」